

するのである。

二 中観・唯識の対論——仮象批判の立場性の問題

“Metaphysik”の仮象を露呈したのが中観だとすれば、“Metablogie”を積極的に提示したのが唯識だと言えよう。しかし、両派の間には仮象批判の立場を巡る熾烈な論争があった。中観は、唯識が「法空」の立場にしながら「識」を立てる矛盾をつき、仮象批判を促してくる働きを存在者化することによって、新たな仮象に取り込まれていることを批判する。それに対し、唯識派は、仮象批判が為されるためには、仮象が生起する場を確保せねばならず、それ無しに否定を繰り返すことは方向性と願を失った「悪取空」であると中観派を批判する。両派ともに仮象批判そのものの仮象性を見極めている。

三 宗教間対話という営み——自らの仮象性にいかにして付き得るか

相対主義と原理主義が二極分化する現状の中で、宗教間対話の可能性を探るためには、以上に見た二重の仮象に陥る危険性を自覚化していく道を共有しなければならない。原理主義的仮象を批判するのは容易だが、その際、相対主義もまた観察者の立場という仮象に囚われていることを見逃すわけにはいかない。それはあらゆるパースペクティブを承認しているかのような観を呈しながら、自らが「脱パースペクティブ」という仮象に陥っていることに気付かないことが多い。それでは、原理主義的仮象を批判し得る地平には到底立ちえないであろう。

イスラームにおける宗教間対話の理論

松本 耿郎

イスラームはゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教の後に生まれた宗教であり、しかもそれらの所謂既成宗教が行われている地域において受容されていた宗教である。したがって、イスラーム誕生の当初からイスラームはこれら既成宗教と対話することが求められていた。『コーラン』の第五章四十八節から五十三節の言葉はイスラームが宗教多元主義を前提とした教えであることを示している。ただし、宗教多元主義 (religious pluralism) の概念でどのような状態が意味されるのが問題である。勿論、この場合の宗教多元主義がイスラームの世界観の中に複数の宗教が包摂されるというイスラーム至上主義のものであるのか、あるいはイスラームを一つの世界観とみなして、複数の世界観のうちのひとつとして他の諸宗教と並存するものであるとする相対主義的立場であるとするのかは個人の立場により異なる。前者を包摂主義的立場、後者を相対主義的立場とするならば、この両者の傾向はイスラームの歴史を通じて対立しながら存在してきている。実は、この両者の対立はイスラーム思想の歴史においても深刻な問題を引き起こしていた。互いに相手の立場を異端である、瀆神であると非難しあうことがしばしば起こったからである。宗教間対話は重要であるが宗教内部の対立の克服と対話の実現も大切である。

パネル

ところで、包摂主義的立場と相対主義的立場のいずれの立場においても他宗教との対話は重視されるが、イスラーム至上主義の立場に立てば他の諸宗教はイスラームを頂点とした階層的宗教世界の階層図の中ではイスラームよりも下位のものと看做されてしまう。この場合には対等な立場での宗教間対話は成立しなくなってしまう。他方、相対主義的立場に立つならばなにゆえにイスラームを選び取ったかを理論的に説明できない懷疑論に陥ってしまうことになる。同じことはイスラーム以外の諸宗教についても言えることである。それぞれの立場に固執する場合には結局は自宗教至上主義に行き着いてしまい、その結果は排他主義になり宗教的非寛容に陥ることになる。宗教多元主義に立ちながら自宗教至上主義を回避し、他方相対主義的懷疑論を回避することが宗教間対話を実りあるものとするためには大切な点である。イスラームにおいてこのような実りある宗教間対話を可能ならしめる相対主義的宗教多元論の枠組みを創り上げている思想は「存在一性論」(wahdat al-wujūd) 学派の思想であると思う。この学派の思想では唯一の真実在者のみが実在し、それ以外の諸存在者は唯一の真実在者の影の存在とされる。この影なる諸存在者は唯一の真実在者の自己顕現・自己分節の結果として出現しているとされている。角度をかえて見れば、唯一の真実在者とは原初の自己顕現者・自己分節者ともいえる存在なのである。この原初の自己分節者を一者ともムハンマド的実在とも呼ぶ。それは唯一の真実在者の本質を知る存在という意味で宇宙論的預言者ということになる。したがって、預言者性は宇宙の創造の始まりの時点で存在しているので

ある。この宇宙論的預言者は唯一の真実在者の本質について最も近くにいて得られる認識を持つ。このような唯一の真実在者への近さを「ワラーヤ」(近接性)と呼ぶ。このような「ワラーヤ」を備えた預言者が各時代、各民族にそれぞれ預言者として出現するとされるのである。それゆえ、かの宇宙論的ムハンマド的実実在がアブラハムとして現れ、モーセとして現れ、イエスとして現れ、ムハンマドとして現れたというのである。彼らは唯一の真実在者に限りなく近く、親密な関係を持つ存在である。近現代になると存在一性論の「ワラーヤ」論はアブラハム系統の宗教の枠を越えて仏教、儒教などの文化の中でも真実在者に近づくことが出来た人々が現れていると考えるようになる。このようにして、イスラームにおいては真実在者への近さという概念を基礎に諸宗教を肯定し、宗教間対話を実践しようとしている。

パネルの主旨とまとめ

八巻 和彦

一般に宗教においては、社会集団としての信仰と、それを導く指導者の個人としての信仰のあり方が区別されつつも、極めて緊密に結びついている。指導者の信仰が他の信者たちの模範とされるからである。逆に、指導者は自己の信仰のあり方を、自己が率いる集団の信仰をいかなるものとするかという観点か